

NPO 法人環境市民 理事会 第 10 期 第 3 回 (通算 95 回) 理事会 議事録

(a) 日時及び場所

日時：2020 年 2 月 25 日 (火) 13:00-15:00

場所：環境市民事務局

(b) 理事の総数

14 人(うち定足数 10 人)

(c) 出席した理事の氏名 (以下、敬称略)

加藤良太、杵本育生、下村委津子、以上 3 名

(メッセンジャーによる参加) 石崎雄一郎、神田浩史、以上 2 名

特定非営利活動法人環境市民定款第 40 条第 1 項の規定により表決権を行使した理事は次の通り。

太田航平、片山雅男、嘉田由紀子、白石克孝、原田紀久子、松下和夫、以上 6 名

合計 11 名

同定款第 38 条の規定により定足数(理事総数の2/3)を満たし、開会した。

(d) 議長 杵本育生を指名

(e) 議事録署名人 加藤良太、神田浩史

(f) 議事録作成者 下村委津子

■付議事項

中期計画策定のためビジョン、理念、ミッションへの意見を出し合い方向性の確認をした。

杵本理事から、環境市民のビジョンは持続可能な社会を表す具体的イメージであること、また、理念は環境市民の価値観や活動において大切にしていけるべき考え方であることが改めて紹介された。神田理事からは、理念の 3 つ目にある「地域から日本を変えていく」に、グローバル社会とのつながりを意識したような文言があってもいいのではという意見が出た。また、5 つ目の「人、団体、社会、そして地球環境の多様性を大切にする」は、「地球環境の多様性ととも、人、団体、社会の多様性を大切にする」という意味であることが杵本理事から説明され文言の修正をすることとなった。ミッションについても杵本理事から説明がなされ、表現など各理事で再度確認検討し次回理事会で諮ることとなった。

署名欄 議長 _____

議事録署名人 _____

議事録署名人 _____

(以下は議論の詳細を含む。WEB で公開せず)

杵本育生) 中期計画を策定するために、メモ程度の資料だが議論するために用意した。
環境市民は、ビジョンとそのビジョンを実現するためのミッションから成り立ち、そのミッションごとに具体的な活動が生まれるスタイルとなっている。

また、「環境市民の大切にしている理念」は、環境市民の考え方で大切に思っていることを表している。環境市民は「真の民主主義社会をめざし」活動する団体でもある。

ビジョンと理念について、このままでいいのがあるいは何か変更する方がいいのか意見が欲しい。

加藤良太) 持続可能な社会を表しているビジョンは当然このままでいいと思う。また、理念も環境市民としての考え方を表していて分量的にも簡潔でちょうどいいと思う。「あどぼの学校」でも議論しているようなことも含めて「真の民主主義社会をめざす」ということでいいと思う。

下村委津子) 5 番目の「人、団体、社会、そして地球環境の多様性を大切にする」が、違う要素の並列にも見えるが何を表そうとしているのか。

杵本) 社会の多様性と地球環境(自然生物)の多様性を表現したのだが、少々無理のある文言かもしれない。「地球環境の多様性ととも、人、団体、社会の多様性を大切にする」に変えてはどうか。

全員) 良いと思う。

神田浩史) 3 つ目にある「地域から日本を変えていく」に、グローバル社会とのつながりを意識したような表現が入っていてもいいのではないかな。

杵本) 「グローバルなつながりを意識して地域から日本を変えていく」、あるいは「世界とのつながりを大切に、意識する」という感じか。

加藤) 「地域と世界のつながりを大切に、地域から日本と世界を変えていく」ではどうだろうか。

杵本) 一度、文章に落とし込んでみて次回の理事会で確認してみよることにする。

次に、ミッションについても意見が欲しい。まず、エコシティーを作るのだが、最近 NGO/NPO の指標として、新自由主義的指標を振りかざすような形が見えてきている。

加藤) 世界では、新自由主義の失敗が明らかになり、もう新たな道を進んでいる。日本は 20 年遅れていると言われている。

杵本) どういうことが起きたら人類社会は進歩したと言えるのか、また逆の社会になるのか、今後、どういうことが実現できたらいい社会になったと言えるのか、じっくり議論できるといいと思っている。一つ言えることは、第 9 条のような憲法を持つ国が現れたというのは人類の進歩。そして、この先に「核を持たない世界」が実現できれば、人類は進歩したと言えるのでは、どの

ような指標があるのか、また出せるのか NGO から見出していくことも必要では。

加藤) 今、ODA の見直しが行われている。幸福度の指標化が考えられている一方で、公共の分野の民営化が行われている。

神田) 農業や水道事業などで起きている問題。

杵本) 企業が経済をつくるのではない。

神田) SDGs の企業での研修も増えてきている。その中で先行している企業の事例を知りたい事業者が増えているが、本来の意味が捉えられていない。SDGs を実践するために必要な本来の道を知ってもらうことが大事。

杵本) 自治体の SDGs 評価軸を作らないと。

下村) 持続可能な社会の中で経済活動はどんなふうに行われるのか、企業はどのようなべきなのかという発想をしなければいけないと思う。

杵本) 「豊かなライフスタイル」それがどんなものなのか提案していかないといけない

神田) 大量消費に慣れ親しんだ人たちが、本質的な豊かさを大切にしたいライフスタイルが重要だという発想に変わっていくことが大事、この世代にどう働きかけていくか。

杵本) 豊かさの捉え方が違っている、価値観の転換が必要。持続可能な消費は、「企業のエシカル通信簿」と「ぐりちょ」の2本立てで進めることができる。

下村) 将来的には、このプロジェクトをアジアにも広げることができたらという話をしていた。

加藤) 東アジアとの「消費、経済」に関連したつながりを考えると、非常に重要なことだと思う。これから東アジア圏で持続可能な消費はさらに重要度がましてく。

下村) ライフスタイルと環境教育の話になるが、次世代を育む大人、今の先生の世代が受けてきた教育は ESD とは程遠いもの。経験していない先生に教えることができるのか。先生の研修が必要では。

加藤）あるいは、先生自身でなくとも地域の人たち、地域で活動する環境教育の実践者たちの力を生かして子どもたちへ経験や知識を提供することはできるはず。地域での環境教育は大切。

杵本）本当の意味の自然体験ができない、地域でそれを実現できるようなことをする。

加藤）環境市民の場合、どの方向、どのアプローチから取り組むのがいいのか、他団体のお邪魔にならず、どのような良いことができるのか、環境市民がどのスタンスでいるのかを考え明らかにしておければ。地元でしっかり活動されている団体と環境市民との連携は考えられる。

下村）実際に子ども達を対象にした活動をしている団体と一緒にプログラムを開発することもできるはず。

杵本）前回の理事会での片山理事から森の幼稚園の話が出ていた。すでに実践されている団体もあり、われわれが森のようちえんをするというわけではないが、片山理事の意見をミッション「エコロジーな次世代を育む」の中に入れてみた。

杵本）以前、スウェーデンに調査に行った際にわかったことだが、スウェーデンで使われている商品が、作られた国でどのように作られているかが調べられ紹介されていた。

「世界の人々や NGO と協働する」について、消費を中心に考えてみる。

杵本）今日はメモ程度の資料しか準備できなかったが、それぞれ理事のみなさんで内容について読んでいただき次回に意見をいただきたい。

杵本）次回の理事会では、総会に出せる中期計画にする。また、決算、事業報告も総会の議案にかけられるよう承認する必要がある。

なお、メッセージャーでの出席をしていた石崎理事からは、意見として下記のメールでのメッセージが届いた。

===以下、石崎理事からのメール===

今日の理事会おつかれさまでした。

「世界とつながりながら、地域から社会を変える」のくだりですが、1992 年と今で大きく違うのは、先進国・途上国という区別がほぼなくなっているという部分にあ

ると思います。

パリ会議が京都議定書を大きく変わった点は全ての国がおしなべて排出を減らそうと押し出した点にあると思います。

中国が途上国という人もあまりいないのかもしれませんが (経済的貧困層・社会的弱者を数多くいますが)

かわって、同じ国の中 (都市と農村、日本でいう東京と地方、インドネシアでいうジャカルタとパプアやカリマンタンなど) での経済・社会的格差が深刻化しているような気がします。

ボルネオ島で活動する NGO のもつ課題は日本とよく似ていて、持続可能性をめざすアプローチも近い部分があります。

「地域」を思う時、ボルネオの片田舎の村と同時に、日本でコツコツ活動してきた村を思い浮かべます。

先日、木頭村の元村長の藤田さんとお話ししました。

子どもの頃は朝早く起きて薪を取りにいったと。

あんなにしんどいことはなかったと言っていました、自然と共にある持続的な暮らしだったとも言っていました。

薪からプロパンガスにかわって、森に行く機会は減ったそうです。

その時気づいたことは、(当たり前かもしれませんが)、自然は教育で教えられるものではなくて、生活にあったのだということです。

でも今、薪を取りに行く生活にシフトすることはありません。

僕がいくボルネオ島の村も、30 代の青年は子どもの頃には 1 年に 1 度ボートで街に行っていたのが、今は週に 1 度大きなモールに行くというくらい急速に生活が変化しています。

だからこそ環境教育が大事なのだと思います。

木頭村では大阪から I ターンした学校の先生一家が、古くから暮らす人たちの言葉をそのまま残し、「じいとばあから学ぶこと」という冊子になっています。

石崎

===以上===

次回日程 5 月中旬で日程調整をする。昨年より早めにすすめたい。